

津田なおみ厳選

兵庫舞台の名画

銀幕かわらばん 特別編 ⑩

昨年8月だった。引越し大名」のロケ地になった姫路城西の丸で出演した星野源、高畑充希のマスコミ向け舞台あいさつがあった。その日は32度を超える炎天下。取材席は天守閣が美しく見渡せる場所だが、スタッフが冷却バックを配るほどだった。

星野はしきりにマスコミの人へのケアを気にし、司会の私にも「暑い中、来ていただいているから、早く終了しましょう」と話してくれた。イベント中も取材陣を気遣いつつ盛り上げてくれ、温かい人柄がにじみ出ていた。

実在する姫路藩の藩主・松平直矩が生涯7回もの国替えを命じられたうちの、姫路か

世界遺産でロケ、作品に奥行き

「引越し大名！」



姫路城西の丸で開かれたイベントには星野源、高畑充希も登場した＝姫路市本町

ら九州への無理難題の引越しを描く。藩の一大事を救うために奮闘するのが引きこもりの書庫番、片桐春之介（星野）だ。しかも「のぼうの城」の犬童一心監督の作品は、商人への借金に始まり、リストラ、断捨離など現代社会の問題に通じるものばかり。そこに武士の悲哀も織り交ぜ、人情悲喜劇に仕立てた。

姫路城西の丸では羽柴秀吉と池田輝政の遺構である石垣の前で、春之介の幼なじみ役

の高橋一生が引越し歌に合わせ野村萬葉が振り付けをした下ネタ満載の踊りをする。スマートな彼が腰をくねくねする姿はかなり面白い。城の裏手にある撮手で、引越し準備の場面が撮影され、口の渡橋では武士らが歩く場面などが撮影された。どちらも非公開の場所だ。しかも渡橋は400年前の床板が現存し、本作に写っている。聞き私は何回も見直した。歴史遺産で映画が撮影される

醍醐味は、こういった魅力的な副産物が映像に残ることだ。

また「日本の清百選」の一つ、淡路島の慶野松原では見せ場であるコメディーアクションが展開される。引越し荷物の血を投げて敵を撃退するおかしさ。長い年月で砂が洗い流され、根が浮き上がったように見える「根上がり松」も登場。「値が上がる」と掛けられ、縁起がいいといわれる名所が写っているのも可愛かった。

リストラされた武士は農民となった。春之介はいつか石高が増えたら城に呼び戻したいと願い、彼らに10年の長きにわたって手紙を送り続けた。孤独な彼らの希望となっただろう。人への誠実さが本作の要諦だ。

春之介が情けない表情を見せるたび、引きこもりの武士の裏側の温かさがにじみ出ていた。春之介の笑顔と、舞台あいさつで見せた星野の笑顔は全く同じものだった。

（甲南女子大学講師、映画評論家・津田なおみ）

◇次回は10月30日に掲載します。

9月25日金曜日神戸新聞夕刊分

こんな理不尽な世界であっても達成しなければ
御家断絶 我が事だけで済まぬ時代に比べれば...
とは言えませんが、そんな時代を経て今がありますね。
勿論映画なりの脚色はあり。ユニークさもありましたが、
実際も そのような「厳しさの中のどかさ」がたくさん
あったのでしょね。